

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制

質保証・質向上委員会

(責任者名) 宮内 孝久

(役職名) 学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況		<p>【外国語学部】履修者：7名 7名全てが対象7科目中4科目修得済 【GLA学部】履修者：11名 対象11名中 2名が対象4科目中3科目修得済 7名が対象4科目中2科目修得済 2名が対象4科目中1科目修得済</p> <p>本プログラムは今年度前期より開始されたため、まだ全学的な認知度は低い、2023年度より先行して開始されたリテラシーレベルプログラムの履修者と修了者は増加傾向にあるため、リテラシーレベル修了者に向けた応用基礎レベルのプログラム履修を積極的に訴求したい。リテラシーレベルと応用基礎レベルの修了要件科目は一部重複するため、今後リテラシーレベル修了者が応用基礎レベルを履修するようになれば修了者拡大に繋がると思われる。</p>
学修成果		<p>本プログラムでは、データサイエンス及びAIの基礎知識を応用的課題へ活用できる力の育成を目標としている。各科目において課題レポートやプレゼンテーションを通じて到達度を把握し、統計的思考力・分析力・論理的説明力などの観点から成果確認をおこなっている。年度末には履修者アンケートを実施し、教材内容や課題設定の改善に反映することで、概ね教育目標を達成していると確認する予定である。</p>
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度		<p>本学の初年次科目およびデータサイエンス関連科目の授業評価アンケート結果を総合的に見ると、到達目標について「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生は平均 約86% と高い水準で推移している。また、情報基礎科目の授業難易度については、ちょうどよかった」と回答した学生が 約80% を占め、多くの学生が適切な水準と受け止めていることが示された。これらより、授業内容は概ね学生の理解度・負担感に即した設計となっていることが確認できる。これらの履修者へのアンケート結果をふまえ、必要な内容・水準は維持したうえで難易度等の調整を検討していく。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度		<p>本プログラムは実施初年度であり、修了者に対する正式なアンケートは未実施である。しかし、授業内で得られている中間的なフィードバックでは、学修内容の実務的な有用性や段階的に学べる構成への肯定的な意見がみられ、今後の履修者アンケートにおいても一定の推奨意向が示されることが期待される。正式なアンケート結果については、次年度以降の教育内容の改善に活用する。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に に向けた計画の達成・進捗状況		<p>プログラム開始初年度の令和7年度は、幅広い学生への周知を目的として、新年度ガイダンス用のチラシや動画を作成し周知を図った。また、学生用ポータルサイトでは、リテラシーレベルの履修者・修了者198名に対し、本プログラムを発展的内容として紹介し継続履修を促した。これにより、既存履修者の継続受講を通じて、全学的な履修率の向上が期待されている。</p>

自己点検・評価の視点		自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点		
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは今年度より開始されたものであり、修了者の卒業は令和8年度以降に発生する見込みである。本学では全ての卒業生を対象とした「卒業生アンケート」を実施しているため、修了者の進路や活躍状況については、その活用により行う予定である。また、卒業生の就職先を中心とした企業の方を対象とした「企業アンケート」も実施しているため、企業等からの評価はその活用に加えて、必要に応じたインタビューの実施により把握することを予定している。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムは新規開設であり産業界からの直接的評価実績はないが、基礎プログラム（リテラシーレベル）申請時には、企業より「社会との関わりを体系的に学べる構成である」「演習を通じてデータを読む・説明する力が育成されている」との評価を得ている。また、特定ソフトの活用機会や授業間連携の課題が指摘されたことから、これらを応用レベル設計時の留意点として整理した。応用レベルはリテラシーレベル修了に必要な科目に加え、より発展的な内容を扱う科目を追加して構成しており、産業界の視点を踏まえた学修内容の深化を図る。
	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	本プログラムは実施初年度であり、現時点では学生の「数理・データサイエンス・AIを学ぶ楽しさ意義」に関する定量的なエビデンスは蓄積されていない。しかし、授業設計においては、身近なデータを扱う基礎的な分析体験から、学生が「理解できることの楽しさ」や「自身の関心領域に応用できる意義」を実感しやすい構成としている。特に、理論と実践を往還しながら学修する設計と、学生が主体的にデータを扱う演習を重視していることから、今後のアンケートにおいても、学修に対する関心の高まりが得られることが期待される。これらの結果は次年度以降の教育改善に活用し、学生が楽しさと意義を感じながら継続的に学ぶ環境の充実に図る。
	内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	本プログラムの修了要件科目の授業アンケート内の到達目標を達成したかという項目で「そう思う」「ややそう思う」と回答した学生の平均は約86%と概ね高い水準で推移している。基礎演習Ⅰ・Ⅱは9割前後、デジタル・シチズンシップ論では100%と特に高い評価が得られた。一方で、専門科目の一部には改善の余地も見られる。これらの結果を総合し、プログラム全体として学修成果の確実な定着を図るべく、授業内容や水準の維持・向上に引き続き取り組んでいく。